

次の文章は、若松英輔著『魂にふれる―大震災と、生きている死者―』の一部です。

問題1. 下線部1)の「病む者に元気になってと声をかけることが、いかに残酷であるか」について、なぜそのように指摘しているのか、本文の内容を参考に100字以内で述べなさい。

問題2. 下線部2)の「苦しむ者は、多く与える者である。支える者は、恩恵を受ける者である」とはどのようなことか。本文の内容を参考に説明し、それに対するあなたの考えを加えて600字以内で述べなさい。

## 魂にふれる

魂にふれたことがある。錯覚だったのかもしれない。だが、そう思えないのは、ふれた私だけでなく、ふれられた相手もまた、何かを感じていたことがはっきりと分かったからである。二〇一〇年二月七日、十年の闘病のあと、妻が逝った。相手とは彼女のことである。

亡くなる二カ月ほど前のことだった。がんは進行し、腹水だけでなく、胸水もたまりはじめていた。数キロにおよぶ腹水は、身体を強く圧迫し、胸水は呼吸を困難にする。がん細胞は通常細胞から栄養を奪いながら成長する。彼女のからだはやせ細り、骨格が露出し、マッサージをすることすらできなくなっていた。薄い、破れそうな紙にさわるように、彼女の体に手をおき、撫でることができる残された場所をさがしていたとき、何かにふれた。

まるい何かであるように感じられた。まるい、とは円形ではない。柔らかな、しかし限りなく繊細な、肉体を包む何ものかである。魂は人間の内側にあるというのは、おそらく真実ではなく、それは一種の比喩に過ぎない。むしろ、魂がゆさぶられるという表現は、打ち消し難い実体験から生まれたのだと思われる。外界の出来事に最初に接触するのは、皮膚ではなく、魂なのではないだろうか。肉体が魂を守っているのではない。魂が肉体を包んでいる。

どれほどの時間がたったのか分からない。見つめあいながら、深い沈黙が続いて、「こういうこともあるんだね」と言葉を交わしたのを覚えている。彼女は少しおびえたようだったが、起こったことの真実をいっそう深く了解していたのは、おそらく、彼女の方だった。抱きしめる。何かを感じるのは抱きしめた方よりも、抱きしめられた方ではないか。魂にふれるときも、同じ現象が起こる。

彼女は内心の不安を口にすれば、私が困惑すると思い、沈黙していたのだろう。病者は、介護者が思うよりもずっと、介護者をはじめ自分を生かしてくれる縁ある人々を思っている。あのとき、私たちは彼女の最期が遠くないことを知らされたのだと思う。私の理性はそれを拒み、はっきりと自覚したのは彼女の没後だが、それでも、あのとき、私は打ち消すことのできない経験に直面していることには気がついていていた。

彼女は、肉体の終わりをはっきりと感じながら、同時にそれに決して侵されることのない「自分」を感じていた。その日以降、不安におののきながら、またあるときは落ち着きはらって、こんなことを言うと、きっとあなたは怒るだろうけれど、と前置きしながら、死ぬのは、まったく怖くない、彼女は一度ならずそう語った。

1) 病む者に元気になってと声をかけることが、いかに残酷であるかは、病者の経験がある者はもちろん、病者と暮らした経験がある者に説明は不要だろう。それが生死を賭けなくてはならない病であるとき、状況はいつそうはっきりする。元気になりたいのは病者であり、その困難を知り抜いているのもまた、本人だからである。

余命を感じている病者は、いわば中間世界に生きている。現実世界にありながら、実在の世界にむかって歩き始めている。それは古代の哲学者たちが語った、真実の存在を感じる地平であり、詩人たちが言葉を受け取る場所である。聖者が日々往復する道である。病者から発せられる言葉がしばしば、常ならぬ叡知を感じさせるのはそのためだ。彼らは、病室にありながら、異界からの風を感じ、万物とつながろうと心を躍動させている。

「健康な」人間が、病者にむかって「元気になって」と言う。発言者は、励ましのつもりだろうが、病者にはそう聞こえない。元気になることが、関係を結び直す条件だと聞こえる。その言葉は、現実世界に戻ってくるには、「元気」になるほかないと、ほとんど暴力的に伝えているに過ぎない。それは、震災の被災者にむかって、感謝しているなら、その気持を金品で表わせというのと同じく冷酷な言葉である。

そうなるという言葉がない、と言り返されるかもしれない。だが、見舞いに行っ、どうして病者を励まさなくてはならないのだろう。どうして被災者を鼓舞するところから始めなくてはならないのだろう。ただ黙して、そばにいる、それだけで十分ではないのか。話さなくてはならないと思ひこんでいるのは見舞う者で、病者ではない。励まさなくてはならないと思ひこんでいるのは、自分を「支援者」だと誤認している者だけだ。

2) 苦しむ者は、多く与える者である。支える者は、恩恵を受ける者である。決して逆ではない。持てる者が与え、困窮する者は受ける、それは表面上のことに過ぎない。

自分でベッドから立つこともできなくなった妻から受け取ったことに比べれば、私が妻にできたことは、実取るに足りない。震災下でも同じことが起こっている。

被災地の外に暮らす者が、自分に何が援助できるかを模索するだけでなく、自分たちが、被災者によって何を与えられているかを、真剣に考えなくてはならないところに私たちは立っている。

ふれるだけで十分である。ふれ得ないなら、ただ思うだけで、何の不足もない。病者は、差し出された手にどんな思いが流れているかを、敏感に感じ取る。病者は、まなざしにすら無音の言葉を読みとっている。同情、共感、あるいはそれを越えた随伴か。病者が望んでいるのは、理解でも共感でもない。それが不可能なことは、当人が一番よく分かっている。

黙って横にいることは、厳しい忍耐を要し、ときに苦痛でもある。なぜなら、苦しむ病者を前に、あまりに非力な自分を痛感しなくてはならないからである。しかし病者は、その思いをもくみ取っている。

彼らが望んでいるのは、日々新しく協同の関係を結ぶことである。協同は、共感や理解を前提としない。だが、互いに全身をなげうって、存在の奥から何かを呼び覚まそうとする営みである。病者は、介護者の不安やおののきまでも、協同を築く土壌にしようとする。それは、大地が朽ちたものを糧に不断のよみがえりを続けるのに似ている。

妻は、自分のために生きようとしたのではない。周囲の者のため、とりわけ私のために苦痛に耐えようとしていた。死の前日まで彼女が心を砕いたのは、母と私の健康である。今から思えば、いつ亡くなってもおかしくなかった死の前日、彼女が懇願したのは、そばにいてくれることではなく、私たちが家に帰って休むことだった。

彼女は自分の生涯のためであれば、一日も早い死の到来さえ望んだだろう。それほど彼女の苦しみは重かった。彼女は医学の通説では、長くても二、三週間しか耐えられないところを、およそ半年間にわたって生きた。

翌朝、病室に行くと、私に眠れたかと聞くので、よく眠れたと応えると、安心して微笑んだ。同じ質問を彼女にすると、ばつが悪そうに、あまり寝られなかったと言った。

彼女は、じっと暮れ行く窓辺を見ていた。声にならない声で酸素マスク越しに、「疲れちゃった」と洩らす。水が飲みたい。どうしてこんなに体が熱いのだろうと言い、マスクを外し、水を飲み込んだ直後、彼女は逝った。

病院のベッドには、彼女の亡骸が横たわっている。友人の神父が来るまで、私は独りでいた。文字通り自分が崩れていくように感じられ、瓦解する音さえ聞こえるように思われた。人はよく、深い悲しみと書くが、悲しみに深さがあることを知ったのも、このときである。